

大学教育モデルの再構成について

～大阪大学、令和元年の改革～



夢はバラ色

佐藤 宏介*

REIWA Restructuring of Higher Education Model in Osaka University

Key Words : Liberal Arts, Active Learning, Trans-disciplinary Education

はじめに

大阪大学憲章では、次代の社会を支え、人類の理想の実現をはかる有能な人材を社会に輩出する高度な教育の推進という高等教育の本務を掲げ、懐徳堂・適塾以来の自由で闊達な市民的性格と批判精神の発展を宣言している。加えて、「大阪大学は、総合大学としての特色を追求する。部局の集合体ではなく、人文科学・社会科学・自然科学・生命科学など、あらゆる学問分野の相互補完性を重視するとともに、新時代に適合する分野融合型の教育研究を推進する。」と教育の総合性を特徴に謳っている。

この総合大学の特性に基づき、大阪大学は教育目標を、学問の神髄を究める専門性の獲得に加え、幅広い見識に基づく確かな社会的判断力としての「教養」、異なる文化的背景をもつ人と対話できる「国際性」、自由なイマジネーションと横断的なネットワークを構想する「デザイン力」を備えた人材の育成としている。

このような人材を4(6)年間の学部課程で育成するための教育実践の実装として、大阪大学は1994年に教養部を廃止する機会に合わせ、それまでの教養課程2年間に専門課程2年間という学年進行型の「横型カリキュラム」を、専門課程の一部前倒しと高学年での教養科目履修の両方を含む「楔型カリキュラム」に切り替え、昨年度まで継続して教育を行

ってきた。

しかし、日本の社会構造が大きくグローバル化し、情報社会をも超えたSociety5.0を迎えつつある時代にあたり、大阪大学では教育課程の在り方を令和元年(2019年)の新入生より四半世紀ぶりに「縦型カリキュラム」へと大幅に改変した。加えて、アクティブラーニング(主体的・対話的で深い学び)、クリティカルシンキングをカリキュラムに陽に取り入れ、高大接続の視点と教育の可視化を反映したものともなっている。本稿ではこれら大阪大学の教育改革の概要について述べることにする。

懐徳堂と適塾の教育思想

今回の教育改革は社会の加速度的変革を受けてのものであるが、その精神は大阪大学の源流である懐徳堂(1724年)と適塾(1838年)に回帰したものである。懐徳堂は宝暦八年(1758年)に「書生の交りは、貴賤貧富を論ぜず、同輩と為すべき事」という定書を掲げ、学生相互の自律・自助の精神を謳った。この定書は、学術の発展のみならず物事の改善につながるの相互批判の精神であり、それを成すためには身分や貧富に関係なく学問の前では偏見なく心を開いて他者や様々な思想を受容し認める心や態度をとること、即ちオープンマインドが必須であることを実に端的に示した表現といえよう。

一方、医師の緒方洪庵(1810-1863年)が開いた適塾は当初医学中心の塾を目指すものであったが、幕末にあつて蘭学を通じ世界情勢の変化をいち早く理解していた洪庵は、世界のことを理解できる幅広い人材を育成しようとして徐々に蘭学の基礎教育を重視するようになった。

適塾における基礎教育方法は、当時としても独特で明治以降の学校制度とも異なる「会読」制度に基づく。具体的には塾生同士が対等な人間として共同



* Kosuke SATO

1961年2月生まれ
大阪大学 大学院基礎工学研究科 物理系専攻博士前期課程(1984年)
現在、大阪大学 大学院基礎工学研究科 システム創成専攻 教授 工学博士
TEL: 06-6850-6370
FAX: 06-6850-6341
E-mail: sato@sys.es.osaka-u.ac.jp

でオランダ語文献を読むし、塾生の相互評価で進級する。洪庵が直接教えるのは最上級クラスに限られ、他のクラスは先輩が後輩に教える塾生同士の相互学習、グループラーニングを行った。クラス進級審査は厳格に実施され、学びは徹底した自学自習を伴うものであった。洪庵が適塾で示した「ある程度学びを修めた者が後生を教える」という在り方は、学び合い教え合いながら互いが切磋琢磨することであり、まさに現在で言うところのアクティブラーニングである。

洪庵の手法は、彼の時代から遥か下った2015年、米シリコンバレーで設立されたホルバートン・スクールの特色でもある「先生のいない授業」にも通じるものといえよう。ホルバートン・スクールで学生は無記名の入学試験と無料の授業料で入学し、卒業生の中にはシリコンバレーで高収入IT専門職に就くものも現れている。同校では教師や講義は明確に配置されず、学生はプロジェクトベースのグループ学習を通じて、コミュニティの中で次々に作成されていくコンテンツを教材として専門知識を学生同士で教え合いながら学習していく。運営費は卒業生が就職後3年間にわたり給料の17%を学校に支払うことで賄われており、学位の授与は無くとも社会の多様性に対応した人材を輩出する学校として注目を集めている。

昨今は、教え合うこと、学び合うことがアクティブラーニングであり、海外から取り入れられた最新事例のように煽られている感があるが、日本では二百年前から教育組織のカリキュラムポリシーとして実践され、時代の変革期にあって有為な人材を輩出してきた数多くの実績がある。そもそも、アクティブでない学びというものが存在しうるのかという問

いもある。オーバーエデュケーション（教育過剰）が意識されるようになったのは比較的近年のことであり、それ以前はずっと学びというのはアクティブなものであったと考えられよう。

縦型教育モデル

1991年の大学設置基準大綱化を受けて大阪大学では、1994年に教養部を廃止し、新たに全学共通教育機構を設置した。その後2004年に大学教育実践センター、2012年に全学教育推進機構と改組を経たものの、専門科目の一部前倒しと高学年での教養科目履修の両方を含む「楔形カリキュラム」は大綱化以前の教養課程、すなわち低学年で一般教育科目36単位に外国語科目8単位と保健体育科目4単位、高学年で専門教育科目76科目を修めるという枠組みを色濃く引き継いだものであり、先に教養、後に専門という思想が強く残っていたことは否定できない。

そこで、一般教育ではなく**教養教育**として、外国語教育ではなく**国際性涵養教育**として位置付けを見直し、総合型研究大学としての大阪大学の特長をなす高度な**専門教育**をそのままに、低学年生には低学年生向けの教養教育、国際性涵養教育を、高学年生には平行する専門教育で修得した知識技能態度を巻き込んだ高学年生向けの高度教養教育、高度国際性涵養教育をというように、**教養教育～専門教育～国際性涵養教育**の三本柱の枠組みに切り替える改革を行った（図1）。それぞれの柱ごとに入学から卒業まで一貫するカリキュラムポリシーの下で実践され、この三本柱の上に、これら教育の集大成をなす自由なイマジネーションと横断的なネットワークを構想する「デザイン力」の涵養教育が建物

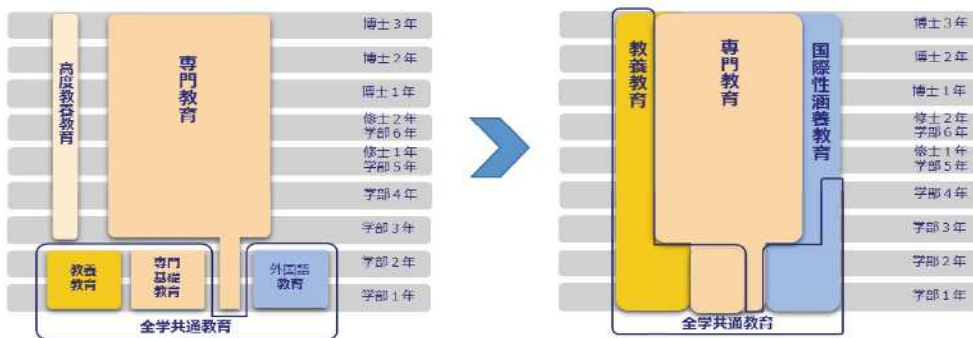


図1 楔形モデルから縦型モデルへ

の高き屋根となる。

この四半世紀ぶりの「縦型カリキュラム」化の大改革に加えて、アクティブラーニング、クリティカルシンキングをカリキュラムに陽に取り入れ、高大接続の視点と教育の可視化を反映するものとした。

教養教育：様々な角度から物事をみることでできる能力や、総合的思考に基づいて、的確に判断する能力を身に付ける教育

専門教育：学部・研究科において提供される特定分野での学識及び能力を身に付ける教育

国際性涵養教育：多様な言語の運用能力及び世界の多様な歴史、文化、社会、科学等についてのグローバルな理解に基づく国際性を涵養する教育

初年次教育の改革「学問への扉 マチカネゼミ」

学部・学科を問わず、大阪大学で「学び」をスタートさせる学生には、1年次の初めに、高校までの受動的で知識蓄積型の学びから、主体的で創造的な学びへの転換が必要である。これまで、1年次前半に多く開講されてきた選択科目の基礎セミナーが、ある程度この要請にできてきたものといえるが、それを発展させ、1年生の春～夏学期に、「課題・文献など一つの内容をもとにアカデミック・スキルズの指導を含む、大学における学びの基礎科目」として、少人数セミナー型科目「学問への扉（愛称マチカネゼミ）」を「縦型カリキュラム」化に合わせて新規開設した。

この新設科目は、全11学部の学生を混在させることが特徴であり、異なったものの見方や課題解決の道筋を意識させることがヒドゥンカリキュラムであり、1年生後半以降から卒業までに受講する各種の教養教育の出発点とする。そのため、全新生約3,300名の必修科目として、約250クラス（クラスサイズ15名程度）を用意した。

この科目は、全国から様々な高校教育（国公立／私立、3年課程／中等6年一貫課程）を受けた新入生が、1年次の初めに異なる学部学科の学生とフェース・ツー・フェースでディスカッションすることで、

- ① 研究者との直接対話によって喚起される学びへの意識の変化

- ② 専門とする分野以外の研究に触れることによる専門分野を見る視野の広がり

- ③ 入学直後に他学部の学生、他分野の先生と密に接する体験が育む分野の壁を超える学習意欲の向上

などが期待される履修効果となり、さらには学部1年生が将来上級学年、大学院へと学年進行していく過程での、他大学に比して総合型研究大学たる大阪大学の特長となっている数多くの学部／大学院横断教育、副専攻／高度副プログラム、リーディング（卓越）プログラムを履修する強い誘いとなる。

高度教養教育

繰り返しとなるが教養教育の力点は、複眼的かつ俯瞰的な視点を持つ、いわゆるクリティカルシンキングが行える人材を育てることである。今日の課題が多様で多面的なゆえ、限られた一専門分野の知識のみではもはや解決できない事態が生じている。己の知的範囲を自ら絞り閉じこもらず、他分野の知識や論理、文化に関する感受性と寛容性から、問題解決のため異分野の人々とも自らコミュニケーションを深めネットワークを広げていける踏み出せる人材が必要である。学術融合や新領域開拓を促進し、新たな課題解決方法を開発しイノベーションを起こすことも求められている。

そのために、専門分野の専門教育以外の知識の授与や能力の育成を行うことで知性の幅を拡張させる教育が必要となるが、一定の専門分野を修得していない段階では、他分野はもとより自分野についても表面的なものに留まらざるを得ない。そこで、一定の専門分野を修得した後に学ぶ学部高学年次および大学院における高度教養教育が肝要となる。したがって、これからの高度教養教育は、教養と専門の二つの教育を両立させ正の相乗効果を生み出す仕組みを整備したものでなければならない。

おわりに

学問所懐徳堂の4代学主の中山竹山（1780-1804年）と交流のあった江戸時代中期儒学者の細井平洲（1728-1801年）は米沢藩の財政再建を成し遂げた上杉鷹山の師であり、「学思行相まって良となす」の言葉で知られる人である（図2）。彼の言葉は、学ぶことと考えること、実行することの三つがそろっ



図2 東海市平洲記念館内の石碑 (著者撮影)

てはじめて学問を遂げたとみなす教育思想そのものである。

令和元年以降に大阪大学に入学した学生が四十代半ばを迎える 2045 年、人工知能が人類を超えるシンギュラリティが起きると予想されている。大阪大学の学生には、細井平洲の「勇なるかな勇なるかな勇にあらずして何をもって行わんや」の言葉に思いを馳せ、各キャンパスで「学び」そして「思い」、社会に出てからは「行い」、これをもって初めて学問の学思行が相まることとなり良をなす者となるよう期待したい。

